



10日目6月24日(火) 20.7 km
アストルガからポンフェラーダまでの20キロ程の行程の途中にはイラゴ峠があり、そこに建つ「鉄の十字架」が有名です。日本カミノー友の会のガイドブックにも「鉄の十字架に祈りを捧げる」と大きな

スペイン巡礼の道

2014 No.3

十字架に願いを込めて石を積み

今年の秋は気温の変化が激しく、風邪をひいてしまいました。年のせい(ー!) 治りも遅く無理はできないかと実感します。そのせいもあり山歩きはほとんどできず散歩程度。佐原はバス移動で歩く距離が短かったのに参加しました。さすが「小江戸」でした！
スペイン巡礼の道はあと200キロです。
植物図鑑はクスノキ。日本の巨木10本のうち9本がクスノキとは知りませんでした。(昭和63年の調査)

11日目6月25日(水) 16.6 km
次の日から登りに入ります。晴れて気持ちのいい日だったので、聞いていたような辛い登りというよりは楽しいハイキング気分♪
フォンセバンドンというかつては廃村だった村(今は巡礼者が増えて、宿もできています)を通り過ぎ、行く手に小高い丘と人々の姿が見えてきました。鉄の十字架は、木



写真で紹介されています。さて、ガウデイの建てた司教館の前で写真を撮り、アストルガを後にします。
バルの気さくなセニョーラと写真を撮ったり、巡礼仲間と抜いたり抜かれたりしつつ、ラバナル・デル・カミーノへ。

性のペンがいいのですが、持っているのはボールペン・・・困っていたら、そばにいた巡礼者が、貸してくれました♪
そこから、この巡礼路では有名なマンハリンへ。ここも廃村だったそう。シャワーもトイレも無いと言われている避難小屋のようなアルベルゲです。トイレが無いのか聞いてみたら、通りの向こうを指差してくれたので、行ってみると掘立小屋があり、床に四角い穴があいていました。昔の山小屋にはよくあったスタイル。欧米の女性にトイレの場所を聞かれたので、そこを教えてあげたら一瞬覗くなり、「NO!」と首を横に振って

の柱の上ののった小さな石が積み重なっています。巡礼者が旅の無事を祈って置いて行くのだそうです。本来は出身地から持ってくるものですが、私たちは少し手前から「文字が書きやすい平な石」を探しながら歩き、2個手に入れていました。しかし、書くものが無い。油

います。しゃがむスタイルがダメなのかな？
気持ちの良い道を下つていくとエル・アセーボ。
楽しい国際交流♪
12日目6月26日(木) 16.4 km
次の日は下り道。石の橋を渡るとモリナセカ。途中四国の遍路道との友好記念碑がありました。そこから今日の目的地ポンフェラーダまでは少し、と思っていた割りに遠かった。目指すアルベルゲは川の向こう、でも向こう岸に渡る橋がありません。ど



来ましたね！まずは座ってお水をどうぞ！」スタッフの温かい笑顔に疲れも吹き飛びました。
そしてこのアルベルゲで、日本のFさんと出会い、彼と一緒に歩いてきたコリアンアメリカンのミス・リーと一緒に会食。リーさんの手料理を

ごちそうになり、たまたま一緒になった韓国青年のカクさんとイギリス人の男性も交えた宴は、とても楽しく心に残るものでした。(つづく)

八ヶ岳歩こう会では、シリーズ物と称して甲州街道や、塩の道など長い距離を何回かに分けて歩いています。今回は「小江戸」シリーズ。単発で3回の予定です。「川越」「栃木」、そして9月末に千葉県佐原に行きました。どこも確かに江戸の面影を色濃く残す、趣のある町でした。佐原ではまず「歩こう会」としてはぜひ行かなくては！

渡嘉敷先生の
歩く植物図鑑
No.48
クスノキ

小江戸料理はお美味しいな
おたけ日記

高齢の方でクスノキを知らぬ御仁はまずいない。戦前の歴史教育で南北朝時代の武将楠木正成にふれ、樹木そのものは兎も角として、「楠木」という言葉を教えこまれてい

る。また今日「楠」という苗字も聞く。クスノキは街路樹や公園樹として数多く植えられてもいる。もともとクスノキは暖地性の常緑樹なので、東北地方や本州の日本海側では見られない。雪に被われると枝が折れやすく、到底寒地では育たず、関東南部以西でないで見られないこともあって、広く全国的にみるとクスノキへの関心は、どうやらそのものよりも名の方である。

表からつづく

ところで、「ごく普通に用いられている「楠」という漢字であるが、なぜクスノキに「楠」を当てたのか、いささか難題である。

クスノキは常緑樹で温暖な気候を好み、本州の伊豆半島辺りから西に自生しており、分布から推察すると「南の木」と言えなくもない。だから書けば「楠」だという。また中国でもクスノキは大陸の南部に分布しているから、もとより漢字でも「楠」なんだという。なかなか念の入った解釈だが、実はこれは全くの誤りである。クスノキCinnamomum camphoraの漢名は、「豫樟」

あるいは「香樟」であり、本来漢字の「楠」は、中国に自生するクスノキ科ナン属のナンPhoebe nanmuの漢名であつて、クスノキとは植物学の上では何の関係もない。

したがって、楠木正成の「楠」なる文字は、もとより中国にも存在するが、別の意味で日本で発生した半国字ということになる。

ついでながら、「くすのき」の和名考に触れると、この解釈もまた奇妙である。語源は「奇しき木」で、古語の「くすし」の転化によるという。「くすし」は不可思議、また霊妙、神妙、あるいは人間離

れしている、といった意味があり、ローライで歌う「くすしき(神怪)ちから(魔力)に魂もまよう」の「くすし」である。クスノキを奇しき木と視たのは、飛鳥時代の仏像彫刻に白檀の代わりとしてクスノキが用いられたからと言われている。しかしながら、どうも納得がいかない。もとより植物の名は暮らしの中から発生するものであつて、クスノキは多くの特長をもち、有用性が高く、目立つ存在であつただけに、古代より暮らしに深く関わっていたに違いない。

この「くすし説」に対して、臭い木と見た「くさい説」があり、今もって定説はない。新村出氏は「語源をさぐる」の書で次のような見解を述べている。・・・「クサイというのには、我々の嗅覚を刺戟する」という意味で「香氣の方も臭気の方も、どちらにも応用した言葉である。であるからクスノキの木はカオリのある木クサイ木である。クスは葉をむしつてみても、小枝を折つてみても、今我々には悪臭とは感じられぬ芳香がただよう。

また五月の末から六月の初めにかけて、いわば夏の初めに花が咲くとき、黄色味を帯びた緑色のあまり目につかぬ地味な花が咲くと、その数日間はかなりのカオリを放つもの

である。いわんやその木の心の根の化石したものなどになると、芳香を放つ。それがこの木の特質で」「総ての部分がカオリを放つから、そこでクスノキといわれるようになったのであろう」と解釈している。

ところで、先に触れたクスノキの分布圏であるが、日本で見られるクスノキは、移入されたものなのか、あるいは自生なのか、渡來說と自生説があつて、最近まで諸説紛々であつた。

クスノキは関東南部以西の太平洋側、四国、九州、琉球(徳之島)に自生し、照葉樹林帯において常緑カシにつぐ大きな存在である。国外では中国(長江以南)、台湾、ベトナム、朝鮮(済州等)に広く分布している。このような中国大陸の分布とクスノキの利用から考察し、日本に見られるクスノキは、元来中国から移入されたもので、それが逸出して自生状態になつたものだという「渡來說」と、もとの自生と見る「自生説」の二説が主張されてきた。

最近では初島住彦博士の唱える「自生説」が多く認められている。初島博士は・・・「日本に古くからクスノキがあつたことは、徳島県から2万5000年前のクスノキ材の遺体が発見されていること

から明らかであり、また『古事記』や『日本書紀』にあらわれている。3世紀ごろの中国の本で、邪馬台国で有名な『魏志倭人伝』の豫樟もクスノキである」という。

さらに、古代に修羅や丸木舟がクスノキで造られていた史実からも、自生説を容易に理解できる。クスノキは材に樟脳が含まれており、容易に腐蝕せず、耐久性があつてこ

とに水に強く、古代には丸木舟の用材にうってつけであつた。日本書紀にも「クスノキの舟に蛭児をのせて順風に放つた」とあり、また古事記にも同じ意味の記録がある。これは大阪を中心とする地域から発掘される古墳時代の舟のほとんどが、クスノキで造られている史実と一致している。

静岡県神明原・元宮川遺跡から発掘された丸太舟は大きく、長さ6.7m、幅65cmあり、静岡市巴町で発見された丸木舟は、幅が広く、幅1.1mもあつて(長さ5.2m)、相当な巨樹を使ったことが伺える。当時の造船は、多くの材を組み立てる技術はなく、1本の太い丸木を掘り込むわけで、当然より太くて長い巨樹が必要とされたことは言うまでもない。クスノキは時代が移ると、仏教の伝来に伴つて材が仏像彫刻に使われるようになる。小原二郎博士の研究によると、

飛鳥時代から鎌倉時代にかけて彫られた木彫仏682体を調べた結果、飛鳥時代に彫られた木像や台座は、全てクスノキが用いられているという。なお、法隆寺や法輪寺などに残る木彫も、クスノキで造られたものが多いという。

このように仏教伝来の初期にクスノキが木彫の用材として用いられた理由は、小原二郎博士は次のように述べている。「クスノキのもつ高い芳香性による」「クスノキはわが国の香木の代表であつて、その高い香りは、よく白檀をしのげるもので」「おそろく、わが国に伝来した、北魏

あるいは南梁などのかずかずの仏像の中に、南方産の香木で彫られた木彫仏が含まれていたもので、それに似た用材を求めてクスノキが選定されたのであろう。金銅仏をもたらし

た百済の工人たちが、檀木に似た用材を捜すとしたら、香木の代表であるクスノキを選ぶのは、自然の成り行きであつたらうと思う」と。

丸木舟や木彫仏の用材になつたクスノキは、いづれも巨木であつたのは言うまでもない。クスノキは長寿で巨樹が多く、環境庁が昭和63年に実施した巨木調査では、全国のベストテンのうち9本がクスノキである。なかには、推定樹齢3千年というクスノキもあると

いう。幹回りも巨大で、1位の鹿児島県蒲生八幡神社のクスノキは、樹高30m、枝葉は広く張つて東西24m、南北29mにもなり、幹は地上1.5m、周囲22.7mもあつて壮大である。この勇姿の前にたたずむと、「くすのき学問、うめのき学問」の金言がうなずける。

「クスノキは生長は遅いが着実に大木になることから、「進歩は遅くても、堅実に成長していく学問」という意味である。一方の「うめのき学門」とは、生長は速いが大木にならず、このように進み方は速いが学問を大成させないままに終わる人を指すのだという。

「くすのき学問」をうなづかせるような、また霊験あらたかな巨樹は、四国、九州に多く、推定樹齢1000年、2000年と言われる大樹が幾つかあつて、そのほとんどは神木として保護され、社の森に残されている。巨大な幹から広く四方に張つた太い枝、その厳然とした姿容をもって、くすしき(奇しき)力(魔力)を絶えず放っているクスノキである。クスノキの語源は正に「くすし」であり、古人もクスノキを神霊の依る木と捉え、畏敬の念をもって仰ぎみていたことであろう。